

お米の歴史学

明治農法に見る稲作技術

国士舘大学21世紀アジア学部教授 ● 原田信男

中世・近世という時代を通じて、19世紀までに蓄えられた日本の稲作技術は、かなり高度なものでしたが、理論的な改良の余地はまだまだ残されていた。

もともと日本の農民たちには、帰納法的思考法が強かったのです。実際の農業に学びながら知識と技術を身に付け、経験を頼りに、それを徐々に改良してきました。現場そのものが学校だったわけです。

ところが西欧の農業は、学校制度の下で研究者や教師たちがまず基本的な理論を学び、その応用を実験的に繰り返し、そこから最適の結論を導き出すという演繹法的思考法に基づくものでした。帰納法にも演繹法にもそれぞれに一長一短はあります。そつした中で文明開化を旗印とした明治政府は、殖産興業の重要な一環であった農業政策に力を注ぎました。明治10年代に

は、農事改良事業を意図して、

農事会・農談会などの会合を開いていきましたが、1881(明治14)年には、経験豊かな老農たち120人を東京に集めて、第1回全国農談会を開催しています。

また、当初は西洋農業に詳しいイギリス人教師をお雇い外国人として、農業の指導に当たらせました。

しかし風土の違いを理解しない彼らは、稲作に関しては無知に等しく、その講義は空理空論に終始しました。そこでドイツ人教師に代えると、彼らは化学肥料を用いて土壌試験を行ったり、全国各地で土質調査を実施したりして、耕耘の浅さ、排水の不良、肥料の少なさなどを指

摘しました。

これに船津伝次平のような老農たちが協力し、在来の伝統農法の上に科学的西洋農法を組み合わせ、乾田馬耕と化学肥料の投入を行うなど、新たな明治農法による稲作技術が確立を見ました。

こつした明治農法によって、帰納法的思考と演繹法的思考が理想的な結合を遂げたのです。



お天気カレンダー

うれしそうとつらさの春

一般財団法人日本気象協会 ● 檜山靖洋

暖かい地方から順番に桜の開花の便りも届く季節です。桜の開花の便りは、うれしいニュースと感じる人が多いでしょう。そして、昔と比べて桜の開花はやや早まっていて、九州から関東では3月中旬にお花見という地域も多いですね。

楽しいお花見ですが、ちょうどこの時期、スギやヒノキの花粉が飛ぶ時期とも重なります。花粉症の症状がひどい人にとっては、お花見はしたいけれど、外にいるのはつらいと思います。そのスギ花粉の飛ぶ量は、前の年の夏の気温と関係があります。暑い夏の後には花粉が多くなる傾向があります。2015年の夏は、北日本で暑く、東日本や西日本は平年並みか冷夏気味の所が多くなりました。

日本気象協会の予想では、2016年の春は、東北で花粉が例年よりやや多く、その他は例年より少なめになりそうです。花粉症が少しでも楽になるといいですね。

